

「《一滴》就職率の低下は教育改革の好機」IDE 現代の高等教育、 525 私大経営は危機か

2010年11月号、IDE 大学協会 2010年11月1日発行を読む

就職率の低下は教育改革の好機

1. 去る8月に発表された『学校基本調査速報版』で、今春の大卒就職率は前年度比7.6ポイント低下の60.8%であることが明らかになった。就職も進学もしていない者が4.0ポイント上昇して16.1%。そして大学院等への進学率は1.2ポイントの上昇で13.4%。今日の経済状況下での進学率の上昇は、厳しい就職環境からの逃避も含まれているはずである。
2. 就職率の大幅な低下が、大学生への就職支援の強化を促す動きを呼び、また、「卒業後数年間は、既卒者も新卒扱いを」という声を導き出している。卒業後数年間を新卒扱いにせよという意見のなかには、在学中の就職活動の早期化と長期化によって学修活動がいちじるしく阻害されている現状を打開するため、就職活動を卒業後に行うことを視野に入れたものもある。
3. 就職環境が厳しいからといって、就職支援を学内外で強化する、大学院進学を迂回路として考える、既卒者を新卒者と区別するなど訴える、というのは、とても本筋の解決にはならない。
4. 多くの大学で頭を悩ましているのは、学生の就職に無関心な教員が圧倒的に多数であることである。学生の就職に無関心だけなら、まだ罪は軽い。少なからぬ教員が、教室できちんと授業を行っていないことが横行している。のではないかと筆者は見ている。
5. 難易度が中くらいのいくつかの大学の文系学生の例であるが、3年生になっても、定時まで教室に座る習慣がない、満身にレポートが書けない、発表する力がいちじるしく乏しい、指示を繰り返さないと宿題をしてくれない、自己学習の習慣がほとんどない……。こうした大学では、教室では蚊の鳴くような声で発表や応答する学生が、学食や学生の溜まり場では驚くほどの大声で話をしていて、見苦しいことこの上ない。
6. エントリーシートを書く力は、日々のレポート作成によって身に付く。発表する力は、インタラクティブな授業展開で身に付けさせることができる。自己学習を促し、自ら学び準備する力を身に付ければ、業界や企業を調べることもむずかしくはなくなるはずである。

7. それぞれの学部・学科で、入学を許可した学生をどのようにしてどのように育てるのかという本質的な議論を重ねる必要がある。そして、何をどのような方法で教えるべきかという概念を確立しなければ、大学の存在そのものが否定されかねない局面を迎えている。

P61

[コメント]

大学は、現代社会を生き抜く基礎的な教育と研究をするところだと思う。大学の社会的使命を考えながら、目の前にいる学生を徹底的に育てる道を通ったところだけが大学としての生存を許される。この文章に書き記されたことは、すべて正しく、納得できる。大いに参考にしたい。

- 2010年11月2日 林 明夫記 -